

Column

『日本美術年鑑』 創刊 80 周年によせて—その編纂とウェブ発信

In celebration of the 80th anniversary of the publication of the first issue of “Year Book of Japanese Art” - editing of the book and publishing of its data on the web

当研究所が毎年編纂・刊行を続けてきた『日本美術年鑑』は、今年、創刊 80 周年をむかえました。昭和 11 (1936) 年 10 月に創刊した、この『日本美術年鑑』は、日本の美術界の動きを一年ごとに総覧できるようにまとめた書籍です。その年の日本美術界での出来事を略述した「美術界年史」、その年に開催された美術展覧会の一覧である「美術展覧会」、その年の新聞や美術雑誌に掲載された美術に関する文献を目録化した「美術文献目録」、その年に亡くなった美術関係者の経歴を掲載した「物故者」の四項目から構成されています。たとえばその年の、ある作家に関する記事を調べたければ、「美術文献目録」の作家の項から記事のタイトルと掲載誌名・号数を探しあてることのできるデータブックの役割を果たしているのです。

書名に「美術」とあるものの、作品の図版が全くない『日本美術年鑑』は、文字ばかりが並んだ、なんとも取っつきにくい印象を与えるかもしれません。そんな文字情報の詰まった本が、言葉ならぬ造形による表現を目指してきた美術の世界で 80 年も前から求められたというのは、ちょっと不思議な気がします。とくに近代以降は作品を作り出しながら、あるいは眼の前にしながら、その思いや感動を言葉にすることで制作や鑑賞という行為を完結させていたように思います。作品に深遠な意味あいを籠めたり、また、もはや戦略といえるほどに自分の制作活動を PR しなければならない現代美術の世界では、言葉によって作品を説明し、補強し、確認することがより求められているといえるでしょう。

それはさておき、作家や作品に関する文献を探し出すというのであれば、数年分の年鑑の頁を繰るよりも、昨今ではインターネット上のデータベースで検索するほうが、はるかに便利であることはいまでもありません。もちろんパソコンのない時代にあっては、年鑑のような書籍が公に開かれた唯一のインデックスでしたし、その編纂も手書きのカードを利用して進められていました。しかし今日では、とくに「美術展覧会」と「美術文献目録」の編集を、パソコン入力によるデータベース化を経た上で行なっています。もはや年鑑のような冊子体のインデックスは不用と思われるかもしれませんが、一冊の本にまとめ上げるという営為を通じて個々のデータの精度を高めることにもなりますし、なにより本というメディアには、何百年もの歴史に裏付けられた記録媒体としての確かさがあります。日本の美術界を不断に記録し続けるという年鑑の趣旨を汲んで、今後も本のかたちで刊行することにこだわっていきたいと思います。

もちろんその一方で、当研究所のウェブサイトでは『日本美術年鑑』に記載された情報をデータベースとして公開し、利便性の向上に努めています。現在、当研究所が蓄積してきた研究成果・研究資料などの情報発信ポータルサイトの役割を担っているのが、「東文研総合検索」(<http://www.tobunken.go.jp/archives/>) ですが、このサイトではほかのプロジェクトでの研究成果とともに、『日本美術年鑑』に記載された「美術界年史」「美術展覧会」「美術文献目録」「物故者」、さらにその編纂の情報源となった展覧会カタログ、美術館・博物館・大学等の研究紀要、美術雑誌などが、簡便なかたちで検索できるようになっています。これは、『日本美術年鑑』編纂事業とともに、1980 年代半ばから取り組んでいる美術情報の電算化、また時代のウェブ環境に適したインターフェイスの開発によるものです。

インターネットが普及した今日では、これらの情報をより効率的な発信することが求められています。とりわけ専門性の高い情報は、国内に限らず広く世界中の専門家にたどりついてこそ、その価値がより深く認められるといえます。そのためには、ひとつの機関のウェブサイトでの発信だけでなく、より多くの人がこのような情報にアクセスできる環境を作ることが肝要です。例えば、国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>) や文化遺産オンライン (<http://bunka.nii.ac.jp/>)、NII 学術情報ナビゲータ CiNii[サイニィ] (<http://ci.nii.ac.jp/>) などは複数の機関が提供する情報が一括で検索できる代表的なサイトですが、これらは個々の機関の所蔵する資料・情報の利活用をうながす仕組みの好例

といえるでしょう。

今年度、文化財情報資料部では、日本美術に関する研究情報のデータ提供者として、国内外の関連機関と連携することを計画しています。そのひとつとして世界的な図書館サービス機関 OCLC(Online Computer Library Center, Inc.) に対して、『日本美術年鑑』に収録された「美術文献目録」の、とくに展覧会図録所載文献に関する書誌情報を提供することに取り組んでおります。OCLCは、世界170以上の国・地域から72,000以上の機関が参加するNPOで、ここが運営するデータベースWorldCat(<https://www.worldcat.org/>)は、初学者から専門家までが調査の起点とするものですので、この連携によって海外での研究環境を改善する一助となると考えています。とりわけ展覧会図録は一般の書籍に比べて情報化が立ち遅れていたこともあり、その所載文献についてのデータは日本美術を専門とする世界中の研究者にとって大いに役立つはずで

す。このようなかたちで、長年にわたる編纂により蓄積された文献情報、人物情報、展覧会情報などのデータをインターネット上で活用できるよう提供することは、『日本美術年鑑』が果たしうる新しい大きな役割のひとつといえるでしょう。80年という歳月を通して貫いてきた美術の基礎文献としての姿勢を守りつつ、新たな時代のニーズにも対応する——そんな頑なで、かつ柔軟な気構えをもって、これからも『日本美術年鑑』の編纂にたずさわっていきたいと思います。

(文化財情報資料部・塩谷 純、橘川英規)

Digest

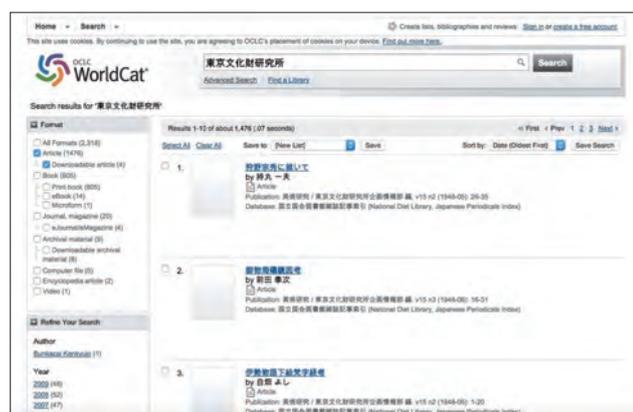
The *Yearbook of Japanese Art*, compiled and published by the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, commemorated its 80th anniversary this year. The publication, which was launched in October 1936, is a comprehensive data book offering a yearly overview of the developments in Japan's art world and comprises the sections – “Annals of the Art World,” “Art Exhibits,” “Bibliography of Art” and “Who Was Who.” We are going to continue the publication of the *Yearbook of Japanese Art* as a fundamental reference for Japanese art, while making every effort to provide data through disclosure on our website and through cooperation with the related institutions both in Japan and overseas, to disseminate information accumulated over the years in a more efficient manner.

(Jun SHIOYA, Hideki KIKKAWA, Department of Art Research, Achieves and Information Systems)



『日本美術年鑑』
物資が不足していた戦中・戦後の一時期、複数年分をまとめて一冊にすることもありました。

“Year Book of Japanese Art”
There were times during and right after World War II when the news and other contents of multiple years were put into a single issue due to the lack of necessary materials for printing.



OCLC WorldCat 検索結果画面

OCLC WorldCat: Search Results page